

網膜剥離について

太田中央眼科

杉山 正和 先生

網膜がはがれることを「網膜剥離」といいます。

網膜剥離と聞くと目に強い衝撃を受けるボクサーなどに特有の病気と思うかもしれませんが、実は加齢とともに誰もが患う可能性がある病気です。

青空などを見上げたとき糸くずや虫のようなものがよぎる「飛蚊症」や、暗いところで突然ピカピカ光るものが見える「光視症」が典型的な兆候です。いずれも痛みはないですが悪化するとカーテンが掛かったように視野が欠けていきます。

眼球の中には硝子体という透明なゼリー状の玉があり、網膜を眼球の内壁にしっかりと押しつけていますが、年を取るとともに硝子体が液化し、圧力が弱まることで網膜のはがれる原因になります。硝子体の液化は50代ごろから起きますが、強い近視や遺伝的な素因があると20代からでも起こります。

飛蚊症などが必ず網膜剥離につながるわけではありませんが、検査は痛くないので、気になったら怖がらずに専門医を受診して病気の芽を早めに摘んでほしいと思います。また、網膜剥離もあまり大きくはがれていない初期の段階で発見しておけば、入院や手術をせずにレーザーで治すことができます。

もし、はがれた網膜をそのまま放置しておくと、栄養が十分届かなくなるので、網膜の機能が低下して、手術をしても視力の回復が悪いといった後遺症を残すことにつながります。異常を感じたら早めの受診をお勧めします。

こんな症状に要注意

○片目をつぶって青空など明るい場所を見ると、視界を糸くずや虫のような黒い点がよぎる(飛蚊症。問題ないことが多いが、急に増え出すと危険)。

○暗いところをじっと眺めていると、突然ピカピカ光るものが見える(光視症)。

○カーテンが掛かったように視野が欠ける。物がゆがんで見える。